

北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 28号

1998年1月~3月



ACC - J 茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and Valley 98' 冬 No28



里芋のおばけ (西表島にて)

《Photo by, MOTOZU》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

初登攀(初登頂)を夢見て

R&Vも今号で28号を数えるが、その内3分の2は私が巻頭言を書いたように思う。今度は何を書こうと困ることもしばしばある。そんな時の逃げ道として使っている手段は、読んだ本の感想を書いてごまかしてしまう。私の読む本は他分野にわたるが、やはり山に関する物が圧倒的に多い。今回もその手を使いようと思うが……。どうだろう、そろそろ書き手を交代してはもらえないだろうか……。

ウルタルII峰(さくっと登ってきます)日本山岳会東海支部&岐阜大学雷鳥クラブ編。この山は、ウータンクラブの長谷川恒男氏やカトマンズクラブの高橋堅氏らの数度のアタックを退けてきた、知る人ぞ知るカラコルムの難峰である。この山を初アタックのアルパインスタイルで、見事落としてしまった2人の若人がいた。山崎彰人氏(28才)と松岡清司氏(24才)である。しかし、山崎氏は下山途中ABCで病死してしまう。この報告書は山崎氏の追悼号でもあるが、3つほど注目した点があった。

とがあるが、私はそうは思わない。事前調査があれば、それだけ余裕のある山行ができるし楽しめることも事実なのだ。もちろん情報のない未知の領域に行くことも私は人一倍好きなので、その時は別である。話がそれってしまったが、私が20代の頃でも山崎、松岡両氏のような根性と技術と体力は持ち合わせてはいなかった。両氏には敬服するばかりである。

その2。山崎氏は過去10年間のうちに、ヒマラヤを5峰も登っている。そのうち4峰は初登頂である。この年齢でこの経歴はすごい。しかし、ウルタルアタック前2年間は国内含めて全く山に行っていない。前年の2月から5月にかけて50日もアイゼンをつけて登攀してきた松岡氏は、何年も山に行っていない人間にヒマラヤに行く資格はない、と断言しているが私も同感である。たしかに2~3年毎にヒマラヤに行っていれば、日本にいる時は仕事に追われるのは当然かも知れない。でもヒマラヤニストはそれであってはいけないのだ。私も酒の席で、あるヒマラヤニストが、俺は日本の山には殆ど行っていないがヒマラヤは登れる、と自慢げに話しているのを聞いた事があるが、たまたま恵まれていただけだ。ひとたび窮地に追い込まれたら自分だけのみならず、パーティ全体を殺してしまうこともあり得る。国内においてもしかりで、常日

その1。カトマンズクラブの高橋氏は、この登攀はスーパーアルパインスタイルだったと絶賛する。悪天候による予定外の停滞を含めての日数だが、デポ補給無しで1泊17日とはすごい。ルート自体もかなり困難であつたらしい。高橋氏もちょっとふれているが行こうか戻ろうか迷った場合、引き返す勇気と突っ込む勇気のどちらが大変であるかと聞かれれば、私は後者の方が決定するには大変勇気がいるであろうと考える。非常に恵まれた環境に居る者以外、ヒマラヤに行ける者は、一生に一度か二度がせいぜいだろうから、そのヒマラヤ登山で撤退を決めるのに勇気があることも事実ではあるが。以前仲間から言われたことであるが、私は突っ込むタイプだという。本図は生還率が最低何%あれば突っ込むのか、と聞かれれば当然100%の時だけ、と答えている。登山はいつも成功するとは限らない。失敗することもある。しかし失敗しても生きて帰ってこなければいけない。山に登る限り危険因子が0になることはあり得ないので、臆病な私はそれを回避する対策をする。実際には生還率が100%とはないだろうが、そう思えなければ突っ込めないのだ。岳友に、おまえは行く前にそんなに情報を収集してしまつては山行がつまらないだろう、と言われたこ

頃のトレーニング(山行)をしていない奴は、一発勝負で難しいルートに行つてはいけないということだ。

その3。山崎氏はかなり衰弱していたとはいえ、ABCまで無事降りてきたのに病死してしまった。はっきりした死因はわからないというが、胃穿孔の疑いが強いという。極度の緊張のため胃潰瘍ができ、何日も食べていなかったところに急に固形物を食べたせいだという。何日も絶食した後は、急に固形物を食べてはいけないということをお心しておくべきである。

カラコルムに消えた若き星(松岡清司君追悼号)碧稜山岳会編

なんという因縁か、先のウルタルII峰で生還した松岡氏が、翌年レディースフィンガーで事故死してしまう。それも前年、ウルタルのトレーニングで登れなかった、レディースフィンガーに再度アタックするための荷揚げ中での事故であった。彼も山岳会に入ってから7年間、非常にアクティブに登っている。国内登山はもとよりヨセミテやヒマラヤもクラウンとウルタルに登頂している。より先鋭的な登山を目指せば目指すほど、リスクは大きくなる。碧稜山岳会の代表、石川富康氏は“これが山好き者の宿命でしょうか”とも述べている。私は山では死にたくない。でも山には行きたい。

生きていつまでも登っていけるようにトレーニングと勉強は怠らないつもりだ。

これでウルタルII峰初登頂という栄冠を勝ち取った者は、この世にいなくなってしまった。これから山岳界において前途有望だったのに、志し半ばにして逝ってしまった若いお二人、山崎氏と松岡氏のご冥福をお祈りします。合掌。

幻の山、カカボラジ 尾崎隆著

ミャンマーの最高峰に初登頂した記録である。こういう山行ができること自体うらやましい限りだ。そもそもこの話は奥さんから持ち上がった。奥さんはフランス人でフランス大使館に勤務しており、さすがグローバルな人間でいらっしやる。私がこの本で興味を持ったのは、山行記録もさることながら、旅行代理店を経営しているフランス人や一橋大隊との登山許可取得競争をめぐるの、心理的な描写が正直に書かれていることだ。どの隊に許可が下りるのかわからないことに、いてもたってもいられず、ミャンマーに出向いたりもしている。このような心理は未踏峰だからこそなのである。私も同じような心理状態になったことがある。国内にての小さな壁（といっても13ピッチほどあっ

たが）でのことだが、この壁に新ルートを作ろうと、前年秋よりルートをのぼし始めた。その時、我々のテントに現れた有名登山家がいた。“ほう、いい所にルートを作ってますね”とお世辞じみた言葉を残して帰っていった。もっともそれは、ツェルトを貸してやったお礼を含めての社交辞令と私は解釈しているが。すぐに冬を迎え、続きは来秋にしようということになった。3月中旬、ある情報筋から、前出の有名登山家のクラブが入山したことを聞く。それも我々のルートの20m離れた所から取付き、上部岩壁は我々の予定ルートを登るのとのことであった。クソーあの野郎、今度会ったらたたきのめしてやると怒り狂ったが、冷静に考えてみれば、あの壁は我々のものでもなく、独占権などあるわけがない。悔しかったら先に登るほかないのである。いてもたってもいられず、急速パーティを編成し雪の降る中、峠越しのルートを使って入山したことがあった。

偵察を含め5回目のアタックで、山崎松岡隊より1ヶ月後第2登を果たしたカトマンズクラブの高橋氏は、ウルタルのスノーピークで、頂上雪田に動く2人の影を発見した時、座り込んでしまっ

たと記しているが、その時の高橋氏の心境はご察しできるのだ。なのにあれだけ二人を褒めたたえることができるのは、心の狭い私にはできないことである。しかしウルタルとは関係ないが、自分より早く取り付いたパーティに対し、たまたま自分の方が早く完登したからといって、数十分遅れで登って来た彼らに“第2登おめでとう”と言える人間にならなくて良かったとも思う。

私はこれからも、心ときめくような登山を続けていきたいものである。

(本図一統)

《目次》

1998年 冬号 1～3月 ACC-J 茨城

初登攀（初登頂）を夢見て	・・・	1
集会報告	・・・	4
山行報告	・・・	5
西穂高～槍ヶ岳《冬合宿》	・・・	6
西表島・浦内川板敷川遡行（遠くの山シリーズ第3弾）	・・・	9
松木沢アイスクライミング by 黒沢	・・・	13
鹿沼・岩トレ	・・・	15
八ヶ岳・赤岳南峰リッジ&阿弥陀岳北稜	・・・	16
西吾妻スキー山行	・・・	17
西吾妻山	・・・	18
蓬沢から宝川への山スキー	・・・	18
谷川岳・中央稜	・・・	20
早池峰スキー登山	・・・	21
遙かなる苗場山	・・・	22
はじめちゃんの思い出日記《Part 3》	・・・	23
友好山岳団体の月報・会報・その他	・・・	25
編集後記	・・・	27

表紙絵…ハバクンドへの下降路よりラカボシ峰をバックに

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

-----【 1月 】-----

1月 7日

出席者 鯉河、古山、菊地、木村、坂本(恵)、告、中居、笹平、遠藤

1月17日 《総会・筑波ふれあいの里にて》

出席者 本図、木村、鯉河、中島、菊地、長浜、広瀬、古山、告、中居、坂本(恵)、生井

1月21日

出席者 古山、本図、坂本(恵)、菊地、笹平

-----【 2月 】-----

2月 4日

出席者 本図、古山、菊地、木村、笹平、坂本(恵)、遠藤

2月18日

出席者 本図、古山、菊地、木村、中居、笹平、坂本(恵)、遠藤

-----【 3月 】-----

3月 5日

出席者 本図、菊地、木村、古山、鯉河、中島、中居、坂本(恵)、笹平、高木、遠藤

3月18日

出席者 本図、古山、菊地、木村、中島、笹平、坂本(恵)

山行報告

《 1998年 1月～3月 》

---【 1月 】---

12月28～1月2日	西穂高岳～槍ヶ岳	し古山、告、笹平
12月28～1月4日	西表島・浦内川板敷川	し本図、坂本（昭）、坂本（恵）
1月1日～1月2日	赤岳	中居
1月 25日	《会山行》松木沢・黒沢	し本図、坂本（恵）、遠藤、生井

---【 2月 】---

2月 15日	岩トレ・鹿沼	し本図、坂本（恵）、遠藤、高木
2月21～22日	《会山行》八ヶ岳・赤岳南峰リッジ	し古山、坂本（恵）、遠藤
	八ヶ岳・阿弥陀岳北稜	し古山、坂本（恵）、遠藤

---【 3月 】---

3月 1日	西吾妻山	し本図、坂本（恵）、中島、名雪、松原、木村
3月15～16日	土樽～宝川・山スキー	古山
3月21～22日	谷川岳・一の倉沢・中央稜	し古山、笹平
3月21～22日	早池峰・山スキー	し本図、坂本（恵）、中島
3月 29日	苗場山	し本図、木村、菊地

西穂高岳～槍ヶ岳

1997. 12. 28～1. 2

パーティ L 古山正文、告広道、笹平孝

27日。開通したばかりの安房トンネルを通過して、新穂高ロープウェイ駐車場に到着。空いた場所にテントを張って休む。

28日。朝一番のロープウェイに乗って、文明の利器の驚異(脅威?)を感じつつ西穂口に楽ちん到着。雪が少なく途中眼下に見えるスキー場は営業していなかった。西穂口からいよいよ雪上歩きとなった。軽量化のためロープは8mm、30m×2本にしたし、ガチャ類も少ないが、ザックはいつもながら重く感じる。トレーニング不足か?先が思いやられる。西穂小屋辺りも雪は少なく小屋の土台は露出していた。ここで、アイゼン、ハーネスを装着。天気も良くなってきて西穂独標までは快適な登りだった。独標には大勢の人がいた。独標からは鋭いところも所々出てくるようになった。西穂山頂は休む間もなく通過、直後の下りで15mほどロープでクライムダウン。すぐに登りついた次のピークは、テントが3、4張りできるほど広かったので、ここでビバークすることにした。千葉県市川からきた後続の三人パーティも隣でビバークしていた(このパーティとは槍までずっと一緒だった。)ここからは、槍ヶ岳は遥か遠くにしか見えない。気象担当の笹平君によれば天気は明日の夕方から悪くなるようだ。

29日。西穂から南岳までは基本的に難しくなった。

出発してすぐにロープで下降、更に半分雪に埋まったクサリ場の下りが20mほどあったし、西穂沢のコルへの下りではクライムダウンをしてから1p懸垂したりした。天狗のコル迄はテントから見た感じよりも以外に時間がかかった。天狗のコルから2pロープをだして登り、畳岩の頭を通り、コブ尾根の頭へ向かうが、みんな疲れているようだ。コブ尾根の頭は広くビバークに適している、どうしようか迷ったが先に進むことにした。ジャンダルムを頂上に登ったところで小休止。下りは20mほど懸垂。ロープをつけてすぐ次のナイフエッジを1歩ずつラッセルし、さらに正面のロバの耳の岩峰を左にトラバースした所でルートが判らなくなった。ロバの耳頂上へ上がってみるが、その先へは悪い懸垂下降になりそうで夏道ではないだろう。クライムダウンで少し戻って、飛騨側へ下るガリーを1p懸垂し、小テラスに下りた。その小さいテラスにたっていると、ガリーの下の方に微かな踏み跡が更に下って行っていてどうもおかしい。ロープ2本をつなげて、告君の様子を見に下ってもらうが、その先はよく判らないがまだロープが必要らしく、途中で支点をつくらなければならないという。後続の単独行のおじさんが、「そんなに下らなかつたはずだ」と言っていた。その内に風が強くなってきて、天気が悪くなり始めた。白



涸沢のコルへ下る最後の懸垂をする笹平

出のコルの穂高山荘までは時間的にいけそうにない。後方のコブ尾根の頭には後続パーティがビバークを始めていたし、ロバの耳頂上にも市川パーティがビバークし始めている時間となっていた。我々も少し戻ってロバの耳の飛驒側の基部に雪壁を崩してテントサイトを作った。単独行のおじさんは、さらにナイフエッジを戻ってジャンダルムの基部にビバークするらしかった。そしてあす時間が合えば一緒に行動する事になった。天気が悪くなると北西の季節風が直接当たる場所なので悪そうだった。しかしテントの風側の面が、切り出す前の斜面にびったりと収まる感じになっていたので、風力特性がよく、思ったより風は強くは感じなかった。

30日。風雪は昨日の夜から続いていた。天気は更に悪くなるらしい。行動は午前中に打ち切るつもりで、少なくともロバの耳のコルへの下り口を見つけることにして前進。昨日のおじさんも合流した。ロバの耳頂上の市川パーティが先に空身で偵察しに、昨日のガリーを1p懸垂して行った。昨日の小テラスから右側に岩場をトラバースしている鎖を見つけた。彼らはテ

ントを撤収しに登り返して行った。その間に、我々が岩壁をトラバース、雪壁をロープ2本つなげてクライムダウン。ロープを固定したところで、ロバの耳のコルから登って来る単独行の人に登ってもらう。その先更に1pクライムダウンし、ようやくロバの耳のコルに着いた。馬の背への登りは雪がだいぶ積もった雪壁となっていて、雪崩を心配しながら2pロープをだす。馬の背のナイフエッジは60m2pで通過。ロープをしまい奥穂高岳山頂へ。山頂で写真を撮って、白出のコルに下る。雪岩稜から鎖場を下って、穂高山荘に着いた。今日は一日中天気が悪かったので、小屋の中の登山者(20人位か)は全員停滞だったようだ。西穂側から今日小屋に着いたのは、2パーティだけだった。小屋は暖かく快適だった。気象通報の時間になると小屋の全パーティが天気図を描き始め、ラジオの声と、小屋の外で暴れている風の音だけとなった。

31日。朝は雪は降っていないが、たいへん風が強かった。濁沢岳まで風に煽られながら登る。山頂から絶壁を落ちる感じで1p懸垂、1pクライムダウン。更に雪壁をクライムダウンし、1pロープを出してクライムダウン、梯子場で1p懸垂下降し、濁沢岳のコルに着いた。この頃になると、風は強いが晴れになっ



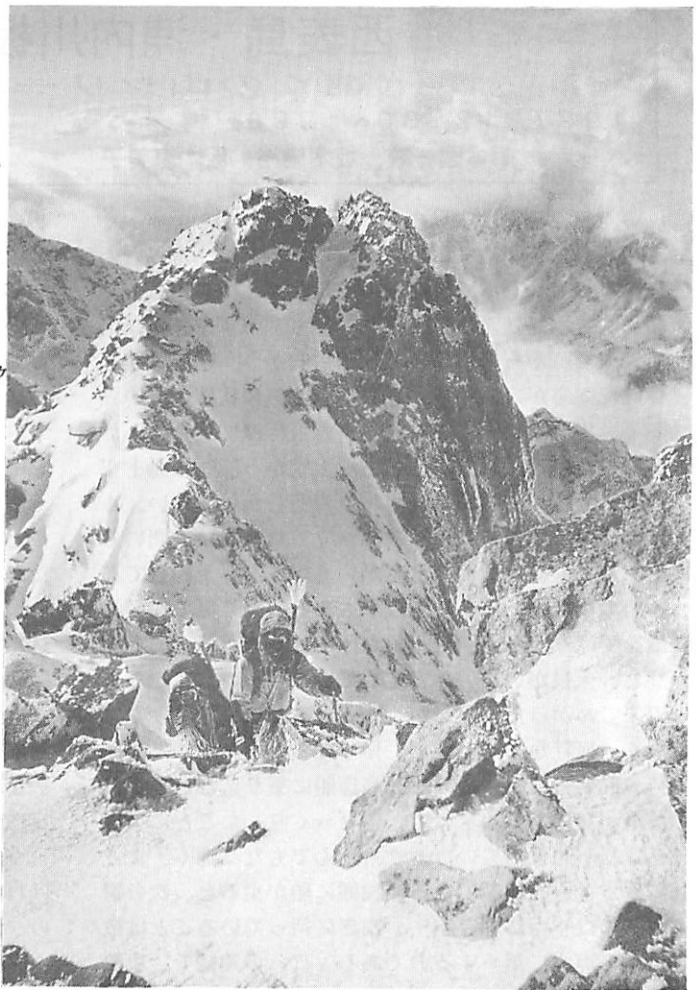
滝谷上部をトラバースする告

た。濁沢の小屋は完全に埋まってなく屋根が見えた。滝谷上部を60mの3pトラバースで通過。稜線を進み、滝谷側のルンゼを2pクライムダウンして松波岩のコル、あとは少しの登りで北穂高岳に着いた。冬季小屋の入口は1階の窓ぐらいの高さにあったが、埋まっていなかった。中は快適だった。この晴れの天気は、明日の昼くらいまで良かった。夜外に出ると横尾尾根だろうか明りがいくつか見えた。

1日。小屋の入口前の夏の(B沢入口に下る)縦走路は、完全な雪壁となっていて、クライムダウンでしばらく下る。途中から滝谷側の稜線を横尾本谷側をトラバースぎみに下る。途中、斜面の下側が雪崩ですっぱりと切れ落ちていて、落ち損ねた斜面上部の雪壁の断面(高さ1.5m位か)の脇を30mほど通って行かなければならないのには参った。2pクライムダウンして雪壁を下り、さらに岩場2pロープをだして、その後岩場をキレットまでくだった。一度大きな登り下りを経て、南岳の梯子場を登って、南岳小屋に着いた。槍まで行くつもりで、急に天気が悪くなり視界の効かない吹雪の中を南岳への登りを試みるが、な

だらか過ぎてルートが全く判らない。天候が更に悪くなりそうなので先に進むのをやめ、戻って南岳小屋でビバークすることにした。小屋と言っても昨日一昨日のとは違い、隙間から雪が吹き込んで積もっていたので、テントを張った。

2日。風も少しは弱くなったし、天気もよさそうだった。今までとは違って、緩やかな尾根歩きとなった。中岳を下る途中のとんでもない所に、4張りくらいテントがいびつな形で張ってあった。昨日の天気の急変を物語っているのだろう。大喰岳頂上はテント村だった様で、槍ヶ岳に登った多くのパーティがテントを撤収し下山の準備をしていた。飛騨乗越からの少し氷化した雪稜を登り、槍ヶ岳山荘に着いた。腹を壊して調子の悪い告君を残し、槍ヶ岳へヒストン。所々に固定ロープがあるし、雪壁は階段となっていた。山頂からは今回登ってきた山々がきれいに見えた。大喰岳西尾根を下るパーティが多かったが、我々は雪が安定していることから、飛騨乗越から飛騨沢を一気に下った。滝谷出合からはドームはよく見えた。ぜひここから上まで行ってみたいものだ。全員へろへろになって



滝谷ドームを背後に北穂に向かう笹平、告
槍ヶ岳(9:48)－槍ヶ岳山荘(10:25)－新穂高(14:52)
*記録…笹平

駐車場の車に戻った。今回は、しばらく会では使用していない白ガソリンコンロを使用した。消費したガソリンは三人で1日当たり0.6リットルでした。

28日

新穂高駐車場(3:24)－新穂高ロープウェイ(8:30)
(¥1500+¥300(輸))－穂高口(8:53~9:13)－西穂平(9:30)
－独標(12:25)西穂の次のピーク(15:30)

(古山 記)

29日

ビバーク地(7:27)－間ノ岳(10:19)－ジャンダルム
頂上(13:16)－ロバの耳ジャンダルム側基部(15:30)

30日

ビバーク地(7:46)－奥穂高岳(12:16)－穂高岳山荘
(13:56)

31日

穂高岳山荘(7:21)－潤沢岳のコル(11:08)－北穂
高小屋(13:56)

1日

北穂高小屋(7:25)－キレット(9:57)－南岳小屋(12:
28)

2日

南岳小屋(6:44)－中岳(8:03)－槍ヶ岳山荘(9:01)－



西表島・浦内川板敷川遊行

(遠くの山シリーズ第3弾)

1997. 12. 30~1998. 1. 4

パーティ 本図一統、坂本昭裕、坂本恵美子

30日。昨晩は水島さんの家に泊めてもらいゆっくり寝られた。早寝するつもりだったのだが、水島さんと会うのもしばらくぶりなので話が弾んでしまった。寝坊して水島さんに起こされ、顔も洗わず家を飛び出す。人形町から一番電車で羽田に向かう。羽田は年末休暇でさすがに人が多い。石垣島の気象状態が悪いらしく、出発ロビーで1時間程待ち飛行機に乗り込んだ。気象のせいだと思うが、名古屋上空から能登半島上空を回って行く。窓の外は雲海と青空しか見えない。4時間のフライトで石垣島に降り立った。話には聞いていたが、沖縄ってなんと暖かいんだろう。予約してある船の出発までは3時間以上もある。乗り場で快い海風を受けながら待つも、日が照ったり雨が降ってきたりと、天候がいまいち安定していないようだ。ここまで来てわかったことだが、西表島航路は一社だけではなく、何社かあるようだ。早く知っていたらこんなに待つ必要はなかったのだ。高速船に乗り込むと、本日は海がしけているとのこと。びっくりしたことにスピードは私が想像していたよりもとんでもなく速く、まさに暴走という状態である。波頭に船が乗ると、次の瞬間、船は空中に飛び出す。次ぎに待っていることは数m下の海面に落下するのである。これの連続で、車酔

い船酔いに強い私でも腹腸がかき回される思いであった。隣に乗っていた女性は完全にグロッキーになり、船浦港に着いても動けない。一人旅のようなのでだれも介抱してやる者もなく、我々が付き添っていた。我々も宿まで行く足がないのでヒッチをやろうとしていた。止まっていたマイクロバスに交渉すると乗せてってくれるという。運ちゃんがすぐ出るから早く乗れと怒鳴っている。ハテ困った。この女性をほっぽっていく訳にもいかないし、このマイクロバスを逃してしまうと我々の足もなくなりそうだ。するとそれを見ていた島の人達が、女性は自分たちで介抱するから行っていいよ、と言ってくれたので、お願いしてバスに乗り込んだ。

我々が泊まった上原館という民宿のおかみはまったく無愛想で、おまえらは泊めてやりたくない、みたいな対応ぶりである。部屋はガラガラで混んでいる様子もないのにだ。それに反して、おやじはたいへん気が良さそうである。おやじに明日浦内まで送ってくれるよう頼むと快く引き受けてくれた。このおやじがいなければ上原館はつぶれてしまうだろうというのが我々の一致した見解であった。

夕食まで時間があるので、レンタサイクルですこし

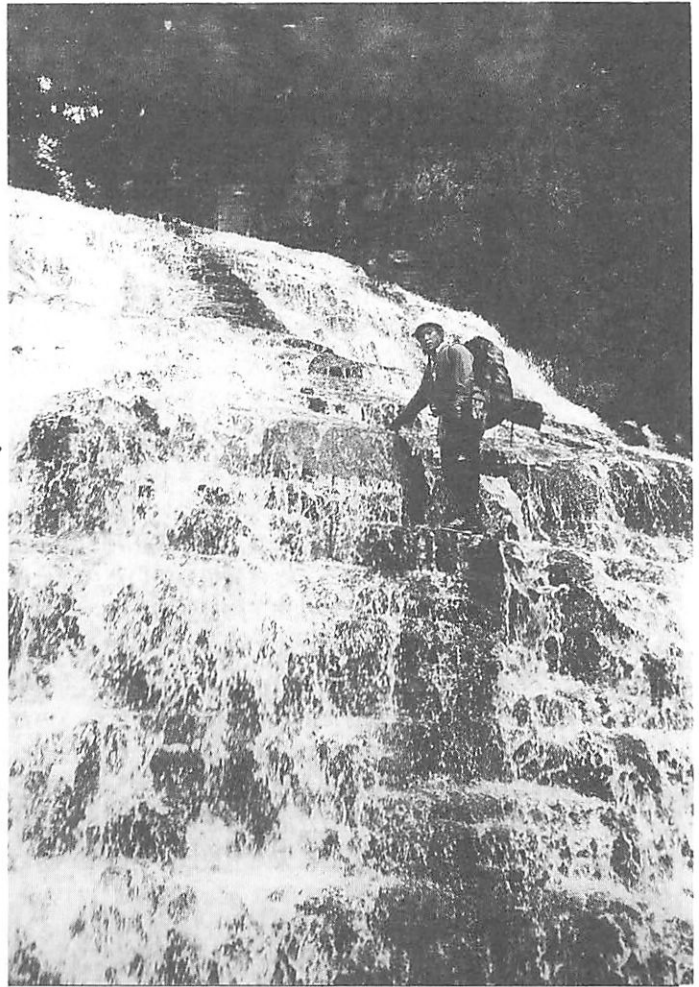


マリュウドの滝にて

ブラブラしながら、明日山に持ち込む泡盛とオリオンビールを買い込む。

31日。浦内川の観光船の始発は9時半なので、それに合わせて宿を出発する。そこで又一悶着起こることになる。山に必要な着替えとかを階段の下でも良いから置いてくれないかと、おかみに頼んだら、混んでいるからとかなんとか言ってOKの返事をくれないのだ。貴重品は入っていないからといろいろ説明し、やっと了解を得た。

観光船の船頭兼ガイドのおばちゃんが、ミニアマゾンの雰囲気漂うマングローブの説明や、巨大しじみ、巨大うなぎの話聞かせてくれる。どうせ巨大うなぎなんか話に聞いただけで見ることにはできないんだろう。やがて船は軍艦岩に着く。観光客はマリユウの滝とカンピレーの滝を徒歩で往復する人が多いようだ。西表島には浦内と大富間に島を横断する唯一のハイキングコースがある。これを横断道というが、我々は板敷川出合まではこの道を行き、板敷川二俣から右俣に入り、ユツン川源頭から古見岳に立つ予定である。景色は想像していたほど本土とそ



マヤグスクの滝にて…坂本(昭)

んなに変わらないが、巨大シダやヤシの木が南国であることを証明している。マリユウの滝とカンピレーの滝を過ぎると観光客はいなくなり、落ち着いた雰囲気になってきた。しかしハイカーは以外に多く10名以上と行き会った。板敷川出合で一本とる。横断道は板敷川に橋がなく徒渉しなければならない。どこを渡ったら良いかわからずウロウロしているハイカーを見かけた。ハンディーナビで現在地を確認するが地図とピッタシで、これは使い物になりそうである。

遡行開始。少し行くと脳天から人の声が聞こえた。上を向くと二人のハイカーがいた。道に迷っていたらしく「ここは本流(浦内川)ですか」「いや支流ですよ」「そこまで降りられますか」そこは泥壁になっていたので指を指して「ここは危ないから横断道は向こうなので登り返した方がいいですよ」「はいわかりました。ありがとうございます」と言って登っていた。幅広の美しいマヤグスクの滝では数名の若者がシュノーケルを使って潜水していた。巨大うなぎを探しているとのことだった。正面やや右をシャワークライムしたが、ここは容易であった。滝上に出ると、その上は狭いゴルジュになっている。そのゴルジュから吐き出された水が岩盤の上を扇状に広がり、幅広の滝

となっていることがわかった。いよいよ最初で最後のゴルジュの突破にかかる。水量はまあまあ、水圧もまあまあで、油断をすると幅広の滝下までもっていかれてしまうだろう。水圧に逆らって左岸をへつるが体重の軽い坂本(恵)には厳しい所だ。薄暗いゴルジュの中の7m滝は、いくら沖繩でも寒そうで泳ぐ気にはなれない。右の被りぎみをザイル使用で直登する。ゴルジュ出口の滝は右岸を巻く。この先滝らしい滝はなく、続けて現れるトロを右に左にヤブの中を巻いて行く。初めのうちはハブが気になって足元を注意していたが、だんだんどうでもよくなってきた。ゴルジュの中のトロとちがって明るく、泳ぐのが一番快適なのであろうが今は冬である。遠慮させていただく。この頃よりトップの坂本(昭)がワァーとかオォーとか悲鳴に似た声をあげはじめる。1m以上もあるどでかい魚がいたと言うのだ。あの太さはナマズじゃないかという。うなぎはいると船頭が言っていたがナマズはいると聞いてない。そのうちセカンドの坂本(恵)も見たとはいいます。やがて二俣に着いた。絶好の幕営地で本日はここまでとする。釣り用具も持ってきたが、どうやら手

持ちの仕掛けで釣れそうな魚君はいないようだ。話に聞いていたエビはたくさんいたが、みんな2~3cm位の小さいものばかりで食えなかった。盛大な焚火を囲んで泡盛とビールで乾杯し、山行の無事を祈った。

1月1日。昨夜から降り出した雨は集中豪雨的な降り方で、目の前の穏やかだった流れは1.5m以上水位が上がり濁流と化している。私はこの山行で気掛かりな点が2つ程あった。1つはハブ、もう1つはこの雨である。ハブに関しては営林署や役場に電話で問い合わせた。人によって言うことはまちまちで、今は冬なので冬眠しているからいないという人もいれば、冬でもハブはいると言う人もいた。はっきりわかったことは、西表島にいるハブは沖縄本島にいるハブと違って、サキシマハブという小型で毒が弱く、咬まれても人が死に至ることは少ない種類のものであるということであった。もう1つの雨についてだが、今年の正月は天気不安定なので、降られることは覚悟していた。ゴルジュを過ぎてからの増水中の往路下降は無理だろうから、なんとしても山越えをしなくてはならないだろう。視界のきかないジャングルでのルートファインディングを考慮しナビを用意した。といっても今日はそれ以前の問題で通行自体が無理だ。停滞とする。雨は断続的に降り続いて水量も増減を繰り返している。この沢は上流が湿地帯なので、急な出水はないが早い減水も期待できない。ラジオで聞く天気予報は、明日も明後日も降水確率が高く、同じような天気だと報じている。日程的にはあと一日しか停滞できない。いくら考えてもしかたないので、焚火の前で明るいうちか

ら酒を飲み始める。

2日。雨は一晩中降っていたが、降りが弱かったので水位は平水より50cm高といったところか。本図が偵察に行き、行動できると判断、雨の中の撤収となる。両坂本も狭いテントの停滞はもうたくさんと思っていたのだろう、雨の中の撤収でも今日は行動できるという嬉しさを表情に表していた。予定を変更し古見岳を諦め左俣から山越えてユツ川を下ることにする。濁りが入っているので少し歩きにくいだが難しい所はない。トップの坂本(昭)には、ナマズがいたら俺に見せてくれと頼んだ。すると直ぐに「本図さんいましたよ」と声がかかる。「どれどれ」と覗いてみると、それはそれは今まで見たこともないお化けウナギであった。太さは私のふくらはぎから大腿部位はあり、長さは1m以上はありそうだ。「坂本、こりゃナマズじゃねえよ、ウナギだど」「そうですか、僕はこれ系には弱いんですよ」私は毛虫は苦手だが蛇とかこれ系は平気である。「よし、手づかみにして今晚かば焼きにしてやる。一匹百人前はできるな」。図体が大きいので動きは緩慢で、我々の姿を見ると一応岩陰に隠れるのだが、あまりの大きさが災いして「頭隠して尻隠さず」状態になる。軍手をはめて「エヤー」っと気合と共に掴もうとするのだが、敵もさるものひっかくもので、かば焼きにされてはかなわないと、ヌルヌルを武器にバシャッと水をひっかけて逃げるのだった。何回かトライしたが、大うなぎ生け捕りの夢はついに叶えられなかった。

溪相は淀んだ流れの中に無数の岩があり、その岩は



ユチン橋にて…本図

苔と小植物に覆われて岩肌は全然見えない。本土には見られない南国特有の、正にお化けうなぎに相応しい溪相である。その上をピョンピョンと跳びはねて行くのだが、これが実によく滑るのである。ちょっと油断するとスッテンコロリンしてしまう。

源流も近くなってくると、本土の沢だと滝が多くなる場合が多いが、ここは平らな湿地帯だ。現在地を見失わないように地図とのにらめっこが続く。やがて、尾根越えをするには格好のルートと考えられる枝沢の出合に着いた。ハンディーナビで確認しようとしたが、上空を木で覆われているとだめなのか現在地が表示されなかった。枝沢をつめ、急な小尾根に取り付く。坂本（昭）が「本図さんいましたよ」と言う。うなぎはもういないだろうし「なにが?」「あれ系統ですよ」「あれって、まさか」「あれですよあれ、ハブですよ」「ホントに〜」狭い尾根の真ん中にトグロを巻いているので前に進めないようだ。好奇心旺盛な私は、まともや「どれどれ」と覗き込む。サキシマハブは本島のハブみたいに大きくてグロテスクではなく、まむしと非常によく似たかわいい蛇である。冬のせい動きは悪かった。ハブを巻いて登るが、まさしく熱帯性のジャングルで、竹の地下茎みたいなヤブが密生していて前進は難行した。稜線にでも視界なし。磁石で方向を

定めユツン川に降り始める。ユツン川は板敷川と対照的で急傾斜で落ち込んでいる。傘の代用になるような里芋の葉に似たお化けの下で記念撮影。ツルツル滑る岩に注意しながら2回の懸垂下降を交えて、最後は右岸につけられた仕事道を利用してユチン橋に降り立つ。宿に戻るバスは3時間ほど待たねばならない。思ってもいなかったことだが、ここでは携帯電話が使えた。2軒あるタクシー会社に電話するも、車は出払っているという。いくら南国でも橋の上は風の通り道で寒い。着替えるも面倒だしどうするかと考えているうち、坂本（恵）が離れた所でヒッチに成功した。車の人達は正月休みで東京から帰省したとのことで、いまから釣りに行くと話していた。かわいい女の子が一人だから乗せたのに、こんな男が二人も連れにいたとは思わなかったよ、などと冗談も言う楽しい人達だった。

宿に着くと例のおかみがカウンターにいた。ニコニコして「おかえりなさい、山はどうでしたか。ひどい雨で大変だったでしょう。横断道でも増水でハイカー達が足止めをくって大騒ぎだったらしいですよ」。恐る恐る「あの一、今晚泊めてもらえませんか」「はい、かしこまりました。部屋は〇〇号をご使用下さい。ん……………。」「どうなってんだ坂本」「僕にもわかりませ〜ん」。愛想の良いこと良いこと、まるで別

人のようだ。あまりの変わりように面食らってしまい、どのように対処してよいのかわからなかった。先日はきつとブルーデーだったんだらうとかつてに結論付けた。

3日。風雨強く、毎日同じような天気滅入る。昨夜の盛大な打ち上げパーティの余韻からまだ目が覚めない坂本（恵）を宿に残したまま、坂本（昭）と私はバスで大原に向かう。バスで往路の船でグロッキーになった女性と偶然乗り合わせる。とても元気そうで安心した。航路の位置的関係で冬期は船浦航路は荒れることが多く、大原航路は静かなようだ。彼女もそれを知って大原航路にしたのかもしれない。早い便で出発する彼女と別れ、仲間川の観光遊覧船に乗る。ここのマングローブは浦内川のそれよりも規模が大きく感じた。やがて後続のバスで来た坂本（恵）と合流する。随分と身軽である。「あれ、ザックはどしたんだい」「宅配便で送っちゃいました」しっかりしてるよ奴は。海は穏やかで高速船は快適であった。石垣島でビジネスホテルに宿を決め、昼飯を食おうとするが店が開いていない。ホテルのおやじに尋ねるも、正月だから夜でないと言ってないだろうとの事。札幌ラーメン屋が開いており、ここまで来て札幌ラーメンはないだろうと思ったが食うことにした。しかし大ハズレでとて

もまずかった。ホテルに帰るとおやじが「どこかで食べたかい」と聞くので、ラーメン屋のことを話したら、「なんだ、あそこに行ったのかい。あそこは不味くて有名なんだよ。この辺の人で行く人はいないんだよ。教えてやれば良かったっけな」だってさ。夜は郷土料理の店がオープンしていたので旨い物をたらふく食うことができた。

4日。タクシーを半日借り切って石垣島観光を行い、午後の便で那覇経由、午後9時頃羽田着。

12月31日

軍艦岩(10:09)ーマリユウドの滝(10:37)ーカンピレーの滝(10:51)ー板敷川出合(12:21~12:55)
ー二俣(16:07)

1月1日

停滞

1月2日

二俣(9:07)ーユチン橋(15:27)

(本図 記)

松木沢アイスクライミング by 黒沢

1998. 1. 8

パーティ L本図一統、坂本恵美子、遠藤和彦、生井一男

…プロローグ…

ある日の夜、私はレンタルビデオ店で大沢たかお主演の「深夜特急・第2便、西へ！ユーラシア編」を借りてきて見ていた。

深夜特急とは……。かつてトルコで取監された外国人が「脱走」することを「ミッドナイトエクスプレス（深夜特急）に乗る」と言った。

私はこの沢木耕太郎の「深夜特急1～6全巻」をすべて読んでいたので、今回テレビで放映するとあってどんな感じなのだろうかと楽しみにしていた。

第1便「熱風アジア編」は、放映上だろうか？多少原作とは違う感じはしたが、ほぼ原作通りなので納得するものだった。さて、次の第2便はいつ放映するのかわからないようにしていたのだった。しかし去年、パキスタン・カラコルムに行った時に同行者の高橋氏、福永さんと以前に行った旅先の思い出、旅先の英会話、そして「深夜特急」の事なんかを話していて、「深夜特急・第2便」は既にテレビで放映された事を知った。『あれ？、いつやったの。あぁ、残念な事をしたなぁ、見たかったなぁ……』

をしている人がいたり、川辺で用をたしている人がいたり、仕舞いにはその同じ川で死体を焼き、その灰を川に流していた。こういう行為もヒンドゥーの教えによれば、聖なるガンガーの水で沐浴すれば全ての罪は清められ、灰となってガンガーに流されれば輪廻天性から解脱が得られる事が起因していると言われている。そんなシーンを見ては機会があれば行ってみたいと思ったが、果たしてこの迫力には私は耐えられるかなと少々不安にもなった。「す～んごいすねえ、俺も行ってみたいなぁ、半年位でいいから何もかも捨ててドロップアウトして旅に出てみたいなぁ」とビデオを見ていてその空間に入り込んでしまっていた。すると突然、電話のベルがなり、気分がユーラシアの彼方に飛んでいたのが現実の世界に引き戻されてしまった。

電話の受話器を取ると相手は本図さんだった。

『久しぶりだな、最近はどうしているんだ。早速だが原稿の依頼なんだ……』

『あれ△×？、俺への原稿依頼はない訳ですよ。何処へも山に行って無いですから』

『あ～なんだよ。ほら1月に松木沢にアイスクライミングに行ったら。あれだよ、あれ』

と彼女の話を聞いて残念そうに言うと、

『あのドラマは、いつやるか分からないんですよ。突然、予告があってやるよといった感じで、私も危うく見逃してしまいそうになったんです』

と書いていたので本当に残念に思っていたのだった。

そして今年になって待望の3便「飛光よ！ヨーロッパ編」が放映された。今度は見逃さずビデオに録画していたのだった。放映の終わりにこのシリーズの本とビデオレンタルの告知があり、ビデオレンタルしている事を知った。そして今日待望の第2便「西へ！ユーラシア編」を手に入れたのだった。

ビデオを見て私はびっくりした。いきなりネバールのカトマンズの町並、私が以前行ったスワヤン・ブナート寺院、ダルバール広場が出てくるは、パキスタンではラワルピンディの町は出てくるは、またパキスタンで食べたナン、カレー、雑然としている町並、私が入ったような同じレストラン、バスや車の警笛のけたたましさが映り、まるでそこにいる錯覚に陥って無性に懐かしくなってきた。そしてインドのカルカッタ、デリー。ガンジス川では人々が沐浴していたり、洗濯

『でも本図さん。あれはアイスクライミングの練習でしょう。あんなの書く様なものは無いですよ』

『あぁ、でも今回も山行回数が少ないんで、原稿が余り無いと思うんだ。少しでも原稿が欲しいんだよ。今月中には他の原稿も集まると思うんだ……』

『解かりました。それじゃ、書きますよ。ところで本図さん。例の深夜鈍行の続きはいつ書くんですか。これから面白いんでしょう。パキスタン～アジアは書く事が沢山あると思うんですけどね。実は今、以前放映された「深夜特急・第2便」を見ているんですよ。今や便利になってテレビ放映されたやつがレンタルされているんです。本図さんの深夜鈍行もこれから書く事が多いと思うんですが…？。だから深夜特急と同じに3部作にしたらどうでしょうか』

『あぁ、俺もそれは見たなぁ、俺は最初のやつ「深夜特急・第1便・熱風アジア編」が見たいんだ。最初は見えていなかったからな。深夜鈍行も深夜特急のコースの逆だから、そうなんだよ、これから面白くなるんだけどよ、まあ、機会を見て書くようにするからよ。それじゃあ原稿の方は頼むよ』
と話し電話の受話器を置いた。

そういえば、アイスクライミングに行ったなあと忘れ去った記憶を掘り起こしてワープロの前に座ったのだった。

久しぶりの山行（ゲレンデでは山行とは言えないけど）といっても氷登り、それも新人をつれてのアイスクライミング訓練である。いつもの様に下館の市役所の駐車場に午後10時に集まり、いざ出発である。今回のスタッフは大御所本図。神栖の100名山ハンター坂本女史。そして今回初お目見えの遠藤。そして放浪のクライマーこと生井の計4名であった。

足尾銅山に着きいつもの駐車場に駐車し、そしていつもの如く宴会。ビールを片手に山の話し、そしてインターネット（最近、パソコンが新しくなって興味を持ったらしい本図さん）とパソコン話とバキスタン、ギルギットの話題で時を過ごした。

翌朝、凍っている滝を探しながら自慢のデリカで進んで行くが、凍っている滝が余り無い。凍っていて尚かつ、空いている所となるとなかなか見当たらない。結局、黒沢に行く事に決まり沢を渡り黒沢に向かった。

下の滝は氷が薄いので、上の滝の手前で、適当な傾斜にザイルを固定。10m位登ってはエイト環を使って懸垂下降の訓練を行なう。まず坂本、遠藤に懸垂下降の際の注意、エイト環のザイルの通し方、懸垂姿勢、

ザイルの流し方をレクチャー。そして実際に懸垂下降を何回か行なってもらう。この懸垂下降はしっかりと覚えてもらわないとアイスクライミングをしても降りてこられ無いと困るので何回も登り降りしてもらった。遠藤君も回数をこなすうちに大分下降姿勢も様になってきた。

『もう良いだろう。大分上手になった。それじゃあ、滝に取り付こう』

との本図さんの見極めをもらい、滝までに登っていく。

黒沢の滝にはもう何人ものパーティが取り付いていた。私達も準備をし、早速トップで私に取り付く。先行がいるので左端までトラバってそこから取り付いた。私の持っているギアでは駄目だと本図さんのバナナピックのピックルとバイルを借りた。これなら百人力だと“カッ、カッ、カッ”と駆け上がった、下から本図さんが

『おめえ、それがいけねえ〜んだよ、もっとしっかり確実に登っていけよ。ゆっくりとだぞ。もうそこいらで、スクリューハーケンを打っておけ』と叱咤された。『すみません。了解しました。ゆっくりとこまめにハーケンを打っていきます』

私も久しぶりの氷登りなのだが、昔とった何とやらで楽しく登らせてもらった。上のバンドまで到着したの

で、ビレー用のハーケンを打ち、登ってきてもらう。坂本、遠藤、本図の順で登ってくる。坂本女史は何回か氷登りはしているようで、余り恐くないようである。確実に登ってきて登攀終了。続いて遠藤君。彼は初めてのようだ。なかなか登ってこないのでもちょっと心配してしまっただが、どうにか見える所まで上がってきた。初体験らしいのでやっぱり恐いのだろう。アックス類を使うのも慣れてないようでバイル、ピックル、アイゼンの打ち込みもうまくいかず、数回打ち込み直していた。そうこうしつつも、ようやくバンドまで登ってきて登攀終了。そしていよいよ本図御大の番である。まずは借りたアックス類をザイルに付け下ろし、登ってきてもらう。『いくぞ〜お！』のかけ声とともに〇〇歳とは思えない勢いで登ってくる。まさに鬼神の様な振舞である。難なくビレー点まで登ってきた。このビレー点には先行2パーティがおり懸垂する支点も使われて無く、仕方なく本図さんにそのまま上の懸垂点まで登ってもらった。ここの登りが大変なクライミングになりそうなので、坂本、遠藤を残し、私が続いて懸垂点まで登っていく。懸垂点に着き、時間的にもう終わりなのでまずは本図さんが下まで一気に下降していき、私は途中のバンドまで降り、坂本、遠藤らに慎重にバンドをこちらまでトラバースしてもらい、彼

らが下降するエスコートをして先に2人に降りてもらった。そして私が懸垂下降をして大滝の取り付き点まで降り、今回のアイスクライミングは終了した。

…エピローグ…

帰りの車では、始めは皆いろいろな事を話していたのだが、私が交代して運転する頃にはみんな疲れてきたのか、本図さんを含め他の2人もスウースウーと寝息を立てていた。

私は、一人運転していてACC-Jに入って（当時はまだ茨城として独立して無く東京がメインだった頃）水島さん、金さんに初めて谷川岳に連れられて“幽の沢V字の左”に行った時の事を思い出していた。あの頃は何も考えず、唯山に行きたかったそんな頃だった。当時は電車で谷川岳に行っていたので、私は一人で上野のホームで待ち合わせていた。しかし水島さんとは面識はあったのだが、金さんとはこの時始めてであり面識が無かった。私は待ち合わせに指定されたホームでザックを椅子に座っていたら、ちょうど隣に同じ登山者が座って来たので、見知らぬその人と山の事なんかを話していた。するとそこに水島さんが来て、その隣に座っている人が今回同行する金さんだと教えられ、びっくりしたものだ。その後も結構こういう偶然

な出会いは多かった。

この時が私は本チャン初めてあり、それもいきなり4級プラスのルート。本来なら一の倉沢南稜、もしくは幽の沢V字の右あたりが入門コースなのだが、私はACC-Jに入会する前に個人で岩場のゲレンデに行つて自分なりにトレーニングしていた（既に当時ゲレンデのハングを人工で越える事は出来た）。そんな事を水島さん、金さん等も知っていてある程度の実力はあると見込んでこのルートに連れていってくれたのだと思う。そういう実力を先輩達に認められなければ当時は何処へも連れていってもらえなかった。“先輩についていく事が出来ない奴は、一緒に来るな”という事である。だから自分で自分を鍛えなければ同じ土俵に立てなかった時代であった。当時、自分の実力を両氏は認めてくれた事はそれはそれで有り難い事だった。とにかくこの時は夢中で登ったので、恐いという事より初めて本チャンを登ったという達成感で一杯だった。

堅炭尾根を下降し、俗名ササルンゼを経て幽の沢から一の倉沢を見ながらゆっくりと歩いて土合駅まで戻つたのだが、登攀終了してからのこの歩きが一番つかっ

た記憶があった。土合のホームに着き、待ち時間に私は無事帰ってきたという安堵感からかホームの椅子でうたた寝をしてしまった。そんな姿を見て水島さん、金さんがほくそ笑んでいたのが記憶にある（当時、私は19歳のガキだった頃であった）。

帰りは途中で2人と別れ、一人東武伊勢崎線に乗り換えて茨城に帰ってきたのだった。

そんな事を思い出しながら坂本女史が遠く神栖から参加するのも山に行きたいからなのだ、自分の過去の経験を思い出しながら感心していた。そうなのである。本当に山に行きたいのならたとえ一人でも遠く離れていても何の支障もない訳である。性別、年齢なんか関係ないのである。本当に好きならば、それだけに打ち込める時期は誰もある訳だと思う。自分もそういった時期があったので、今の彼女がその時期なんだろうなあと一人そんな事を思いながら車を走らせていた。

*ガンガー=ガンジス川

(生井 記)

鹿沼・岩トレ

1998. 2. 15

パーティ L 本図一統、坂本恵美子、遠藤和彦、高木博行

本図さんからの電話で岩トレの原稿を依頼されたが岩トレの原稿を書くことになるとは思わなかったのでいつだったか思い出せずカレンダーとにらみっこしたりしたが思い出せず妻に尋ねると2月15日だと教えられた。自分の行動はチェックされているのか本人より覚えていた。2月14日の夜下館に集合したときにはたしかまだ雪は降っておらず鹿沼に着くと例により小宴会を行う。新会員の遠藤さんはコンピューター関係の仕事をしているらしく本図さんとインターネットの話をしていた。本図さんの若さの秘密は何にでも興味を持ってチャレンジしているからかもしれない。小宴会の後、自分は神社の軒下を借りて一夜を明かすことにしたが賽銭箱がじゃまだったのでズルズル引きずってどかしてしまつた。夜の間中、雪が降り続き、朝早く目覚めるとかなり積もっている。寒くて再びシュラフに潜り込んでいると神社の階段を登ってくる足音がする。賽銭箱をどかして寝ているのでばつが悪く寝たふりをしてしていると手を合わせ拜まれてしまった。今日、私は神になった？岩もよく登れるはずだ？しかし自分はクライミングシューズしか持ってきていないのでこの雪では登れそうもない。今日は、ビレイ役に徹しようと思っていると本図さんがプラブーツとアイゼンを貸してくれた。紙面をお借りしてお礼申し上げ

ます。プラブーツに足を入れるとスキーブーツのようだ。アイゼンを付けると雨具を引っかけ破きそう。車を出発するとすぐに岩場になりまずは簡単な岩で練習を始める。クライムダウンは苦手なので特に練習を繰り返す。徐々に岩のグレードを上げていく。手袋もしているので自分の腕力が使えないのが少し歯がゆいがバランスよく登る練習には良いようだ。練習が無駄にならないように意識して腕力を使わないようにする。今年の目標は5. 11くらいを登れるようになりたい。最後は20Mほど懸垂して登り返すが上部が少しハングしていて乗り越えるときにアイゼンで雨具のズボンを引きかけそうで気になり思い切った動きがとれない。クライミングシューズなら何の問題のないところでもアイゼンを付けていると不自由するのが分かった。雪は相変わらず降り続けているので早めに練習を切り上げ車に戻る。帰路、筑波山を見ると真っ白に雪化粧をしていた。

車8:00-車13:00

(高木 記)

八ヶ岳・赤岳南峰リッジ・阿弥陀岳北稜

1998. 2. 20~21

パーティ L 古山正文、坂本憲美子、遠藤和彦

2/20 前日はものすごい雨で、天気予報も週末の天気が悪い事を告げていた。週末は長野オリンピックが終わる日でもあり、コンディションはあまり良くはないがとりあえず、行ってみることに決まった。パジェロジュニア号に荷物を積んで出掛けるが、3人分の荷物で車は満載状態である。しかし、何と言っても4駆である。後々この4駆が大いに活躍する事となった。

小淵沢で高速をおり、途中より雪道となった。美濃戸からの林道は完全にミラーバーン状態であった。前の車がスタックしていたので、見に行ってみると、なんと大学時代の山仲間の女の子とばったりでくわした。仕事をしながら結構冬山にも行って、張り切っているらしいことを初めて知った。山に行っていると、時々こういう偶然に出くわし、珍しい思いをする。本日は林道終点泊。

2/21 朝、坂本さんに『晴れてますよ』、と叩き起こされて出発した。天気は回復しているらしくか

ついでおり、最初は広い尾根を登り、大きな岩をよじ登ると岩稜となった。慣れていないせいか、早速ドジを踏み、カラビナを1枚落としてしまった。ごめんなさい。こちらの岩稜は昨日よりも短く、すぐに山頂に到着した。

山頂で小休止し、下山にかかった。雪は大いにゆるんでいた。その雪で、何でもないところで、足が少し滑った。あ、一寸滑ったなど、気にも留めていなかったが、どうも滑りがとまらず、おかしい。そのうち、これはまずいぞと思い始めた時は、結構なスピードで滑ってしまった。今思うと、かつて練習した滑落停止は、咄嗟にはまったく出来なかった。そんなことでは、練習の意味がない、といわれそうである。何とか止まろうともがき、結局岩に足が引っかかって、止まった。登攀が終わって安堵し、油断してしまったのだろうか。事故は一見何でもないところで起こりがちであるということ、思い知らされたような気がする。その後は、雪崩におびえながら阿弥陀の谷を行者に向かって駆け下った。

今回の山行は、イージーなルートではあるが、私の初の本番登攀にして、いろいろと課題を残した山行で

た。睡眠数時間でよく起きられるものだ。麓から数時間で到着した行者小屋は、悪天候の為かテントもほとんど張られて居らず、静まっていた。身仕度して赤岳に出発した。文三郎尾根から左にそれ、岩稜となった。しかし、ホールドも豊富で登りやすかった。本番ルートは初めてであったので少々緊張していたがこれならなんとかかなりそうであった。岩のパーティは、他に主稜に1パーティ、他我々のあとに、1パーティが登ってくるのみであった。ルートでは古山さんがトップを歩き、坂本さんが確保するという体制で登り、私は完全に御客様状態であった。そんな体制を4ピッチほど続けると岩稜は終わり、雪道となってほどなく赤岳に到着した。赤岳は5年ほど前の冬に一般ルートを登っているが、それよりもはるかに面白かった。下りは文三郎を戻った。

2/22 今日気持ちよく晴れ、阿弥陀に登りに行った。朝起きると、流石に行者はテントで埋め尽くされていた。阿弥陀へのルートのトレースはしっかり

あった。

およそのコースタイム(時間)

2/21 美濃戸-(3.0)-行者小屋-(1.5)-リッジ
取り付き-(2.5)-赤岳山頂-(1.0)-行者
小屋

2/22 行者小屋-(2.0)-北稜取り付き-(2.5)-
阿弥陀山頂-(1.5)-行者小屋-(1.5)-美
濃戸

(遠藤 記)

西吾妻スキー山行

1998. 3. 1

パーティ 本図一統、中島淳、坂本恵美子、名雪博二、松原丈夫、木村一

今シーズン最初の山スキー山行は『岳人2月号』に載っていた“グランデコベースのパウダー天国”の記事に惹かれ、西吾妻山(2,035m)と決定。メンバーは茨城パーティが本図、木村、中島、坂本の4名。東京パーティが名雪、松原の百名山コンビの2名。計6名である。

グランデコススキー場の Gondola & リフトをシルバー料金(平均年齢50歳?)で乗り継ぎ、スキー場上端で身支度を整えてスキーを引っ張りながらのツボ足登行開始(AM9:00)。西大嶺までは岳樺&コメツガの樹林帯の中の登行、西大嶺は中ノ沢源頭部をトラバースして北東側鞍部を目指す、ここは無樹林の大斜面で一瞬ナダレの心配が頭の中をよぎるが、今日の雪質では心配無用である。

先頭を登る坂本嬢は歩くのも速く、我々ロートル組は遅れ気味になってしまうが、若い事は素晴らしい。出発してから一度も休憩していないのでそろそろ休みたくなってきた頃、

西吾妻の避難小屋に到着。立派な避難小屋の中に入り大休止。小屋に入った当初は我々パーティ6人だけであったが、続々と後続パーティが入ってきた。さすが人気の高い山は違うなど感心してしまった。

ここからは西吾妻の頂上はすぐ目前であるが、頂上付近は濃いガスに包まれておりその上広い頂上なのでどこが頂上か判然とせず、一番高い所を頂上と決めて写真を撮り、徒歩で下山する本図・坂本パーティと別れ、地図とコンパスで方向を確かめて下山(滑降)開始(12:00)。少し下ると樹林帯に入り、頂上を覆っていた濃いガスも薄くなり視界がきくようになってきた。しかし、雪質は悪く表面クラスト、中はフカフカのモナカ状で、我々のスキーテクニックでは思うように回転は出来ず転倒の連続になってしまった。唯一中島スキーインストラクターだけは快適そうに滑降している。

下降ルートは左へ左へと斜滑降でトラバース気味に下降して二十日平を目指す、地図上で目算した以上に遠く感じられた。二十日平まで下降すると谷の対岸



西吾妻小屋にて・坂本(前)

にグランデコススキー場が望まれ、対岸へ渡れる所を探して更に尾根を下降するが、この付近は雪が締まっており、そこそこスキーは回転するが、樹間が狭く苦勞しながらの滑降である。途中、スノーブリッジを渡り、グランデコススキー場の一端に飛び出したが、山とは別世界に飛び込んだ感がする。スキー場の下端に着くと本図・坂本パーティが先着しており、スキーパーティのテクニックの程が窺い知れる山行となってしまった。(14:30 駐車場着)

(木村 記)

西吾妻山（歩き）

1998. 3. 1

パーティ L本図一統、坂本恵美子

東京の人達と現地集合ということで西吾妻山へ行った。グランデコススキー場のリフトを使うと2時間位で山頂へ着く。2名以外は帰りはスキーを使うのでコースが別になる。歩きは西大嶺を巻くところ辺りで少し気をつけたくらいだった。避難小屋で一息入れてから山頂に向かった。山頂はガスがかかり、とうとう三角点は見つける事は出来なかった。以前にも来たことはあったが、だだっ広いばかりでちっとも分からない。今回は日本百名山西吾妻山の山頂だけを踏みに来たが、前回は吾妻小富士まで抜けた。同じ職場の姥貝さんと

いう人を誘って来てみると、この辺りには姥ヶ原やら姥ヶ森、姥明神、姥神石像など、姥のものがあ親しみをわかせていた。

車へ戻るとスキー組はまだ戻って来ていなかった。運良く車の窓が開いていたので本図さんはスキーの板を取り出し、またスキー場へと出かけて行った。1時間後にスキー組も下山をし、その興奮ぶりを語った。

（坂本 恵 記）

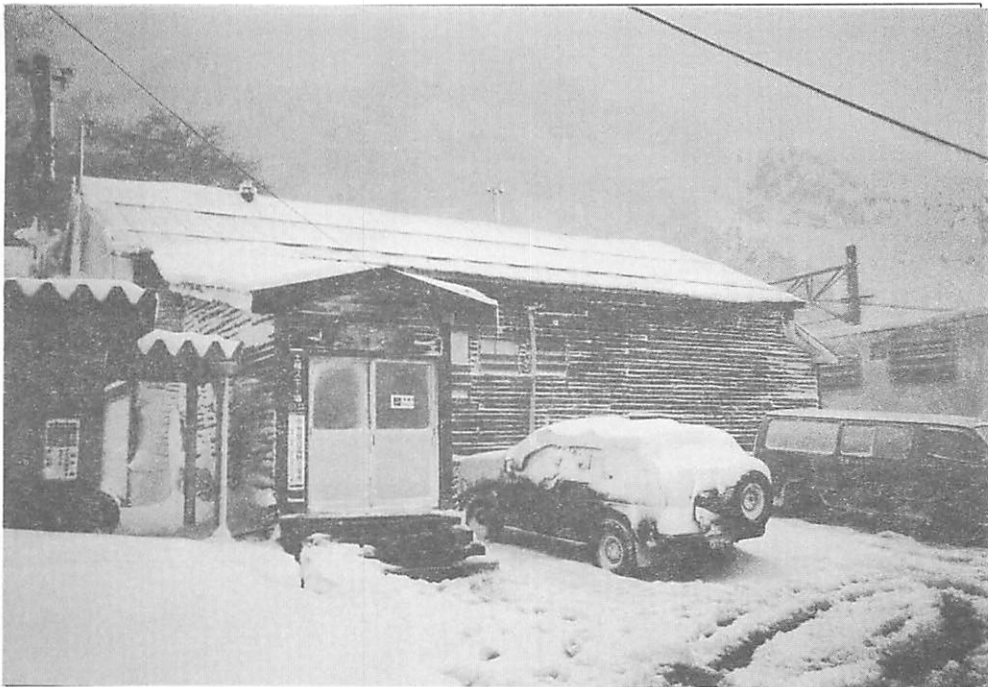
蓬沢から宝川への山スキー

1998. 3. 14～15

パーティ 古山正文

土樽駅の少し先の除雪終了点に車を止める。土樽辺りは雪が少ない。そこからスキー+シールをつけて林道を登る。自然と蓬沢の右岸を進むようになり、左に伸びる稜線に向かう急な尾根に取り付いて登る。樹林が終わると足拍子岳から続く稜線に出た。今は日焼け止めをぬらなければならぬくらい良い天気だが明日

には完全に崩れるらしい。1泊の予定ではあるが、1日で抜けなければならないだろう。稜線上は堅くクラストしている部分があり、時々スキーアイゼンをつける。七つ小屋から清水峠への下りは雪質が全く悪いのでシールを外さず、歩くように下った。清水峠の避難小屋は使えそうになかった。ジャンクションピークの



昨日は全く雪の無かった土樽駅

頂上直下は急傾斜なのとクラストしているのので、スキーを担いでつば足で登る。頂上から地蔵の頭への下りは雪が少なく笹が顔を出しているし、さらにその先はナイフエッジとなっているので、つば足で行動。地蔵の頭と大烏帽子岳の間のコルから予定を変更してナルミス沢をスキーで滑り込む。すり鉢状の広い快適な斜面を大きくターンして楽しんだらもう終わり、後は幅の狭くなったやや快適な沢筋を下る。この頃から雪が舞始めた。ウツボギ沢出合手前で滝が出ていて、左岸を大きく高巻いて行く。ウツボギ沢出合を少し下ったところで、時間切れでビパークすることにした。基本的に沢筋だったので気になったが、遠く上空に聞こえる風のうなりを近くで聞かなくてもよく、ここまで下りてきてよかったのだろう。

翌日、雪はまだ降っていて、結構雪も積もっていた。ウツボギ沢からは結果的に左岸を高くトラバース気味に進み、沢筋を避けなければならなかった。しかし、それがよく判らなかったので、少し高巻いては沢に滑り込んで、滝に行く手を阻まれ、再び高巻きをするという繰り返しになってしまった。途中から左岸を高く進んで行くが、スキーで滑るというのではなくシールをつけた歩行だった。ウツボギ沢出合から林道終点までの約4 kmを下るのに4時間もかかってしまった。林道も傾斜が緩く湿った新雪のため滑らないので、歩くのと変わらなかった。途中のトンネルを過ぎてしばらくすると、除雪車が除雪した跡がありスキーで滑るのをやめ、そこでスキーを担いだ。後は宝川温泉入口

のバス停まで歩き、そこからバスで水上駅まで行き、今度は電車で土樽に行き、車に戻った。雪に完全に埋まった車を掘り起こすのに苦労した。チェーンを着け湯沢ICに向かうが渋滞が激しく進めない。2時間くらいかかって17号国道に出て、三国峠を越えて戻った。

14日 土樽(7:00)ー清水峠(11:00)ーウツボギ沢出合(17:00)

15日 ウツボギ沢出合(7:00)ー林道終点(11:00)ーバス停(12:30)

(古山 記)



ナルミス沢源頭部…これに向かって滑る込む(向こうは小烏帽子、布引山)

谷川岳・中央稜

1998. 3. 21~22

パーティ L古山正文、笹平孝

昨年の夏に登った中央稜に行く事になった。谷川岳に新しく出来た立体駐車場に車を止めて、指導センターで仮眠した。

一ノ倉沢出合に着くと準備をしている人たちがいた。冬の一ノ倉沢は初めてなので、いつもとは違う緊張感があった。ほとんどのパーティは東尾根へ向かっていくが、一ノ倉へ向かうのは1パーティしかいなかった。途中から大きなブロック状のデブリの中を歩いていき、テールリッジに着いた。アイゼンを付けていると岩場の所は結構登りにくかった。上部の所には雪庇が出来ていたの、少し避けて通過した。後で見たら予想以上に雪庇が張り出していて、雪庇の上を歩いた状態だったので今後は注意しようと思った。取り付きに着くと準備に取り掛かる。ロープを結んでいたらドーンという音がして、振り返ると雪崩が雪煙を上げていた。

1ピッチ目の登りからアイゼンをおく所が無くて、なかなか思うように登れなかった。シュリングをぶら下げて這い上がるようにして登っていった。4ピッチ目の核心部の所で、完全に立ち往生してしまって、ハーケンを2本打ってやっと抜けられた。6ピッチ目の出だしの所も手や足の置場がなくて登れない状態で、ハーケンも上手く決まらなかった。古山さんに交代しても

らって、ボルトを1本打った。周りが暗くなってきたので、ヘッドランプを付けてビバーク出来そうな所を見つけながら登っていくと、8ピッチ目の所にテラスがあったので、ここでビバークする事になった。雪をかき分けたら一畳くらいの広さになった。ロープを付けたままツエルトをかぶって、なんとか横になることが出来た。

朝起きると少し雪が積もっていた。衝立の頭まで、3ピッチで着いた。ガスで上の方は見えなかったが、一ノ倉尾根など見ることが出来た。少し休んでから、同ルートを懸垂下降で降りた。テールリッジの所でも数回ロープを出した。一ノ倉沢出合まで来ると、今までの緊張が取れて一気に疲れがどっと出てきた。

帰りに温泉に入ってから帰った。

3/21 出合(6:40)ー取り付き(8:10~8:45)ービバーク(17:00)

3/22 ビバーク(6:30)ー衝立の頭(8:00~8:20)ー取り付き(10:10)ー出合(11:40)

(笹平 記)



早池峰スキー登山

1998. 3. 21~22

パーティ L本図一統、坂本恵美子、水島幸男、金沢清、名雪博二、松原丈夫、中島淳

早池峰ウスユキ草はまだ深い雪の下のこの時期、本図さんから東京のメンバーと山スキーに行く聞き、さっそく仲間に加えて貰う事にした。早池峰は昔から一度登って見たいとつねづね思っていたので(私は百名山ハンターでは無いけれども)。

いつものように土浦に集合。茨城のメンバーは本図、坂本女史、中島の3名である。発達した低気圧の影響か?強い北西の風の中、東北自動車道花巻インターをめざす。土浦から6時間、午前2時に現地到着。ここで約1時間東京のメンバーを待つ。東京の水島さん、名雪さん、金沢さん、松原さんの4名と合流して、早池峰の南面の登山口をめざす(北面の方が山スキーには適している)。思ったよりだいぶ手前で冬季通行止めゲートに遮られる。車はここまでである。仮眠を取り、午前8時出発。肩に食い込むザックの重さは、1,5ℓのワインのせいである。小田越まで約3時間の林道歩きである。途中山スキー隊はシールを付けるが、つぼ足隊の方が早い。特に坂本女史は馬力がある。一人はるか前方を歩いている。雪は締まっていて歩きやすいが単調な林道歩きは疲れる。川原坊を過ぎた辺りから小雪が舞ってきた。12時に小田越着。ひとまず無人の山小屋で休憩をとる事にする。きれいな小屋

である。雪の降り方もだいぶ強くなってきたし、メンバーの歳も考えて本図リーダーの好判断のもとに本日は小屋にてビバークと成りました。ちなみにこの晩に1,5ℓのワインはすべて処分致しました。

翌朝、3時起床、5時出発。本図さんや名雪さん達はスキーを置いて行くとの事なので、私は一人スキーを上げる事に決める。天気はまずまずだが風が強い。そんな中アイゼンを履き高度を上げて行くが、引っ張っているスキーがブッシュ等にやたらひっかかって苦労する。アイゼンが外れそうで具合が悪い、森林限界を抜けるとクラストぎみの雪の斜面をアイゼンをきかせながら登って行くが、どうも私が一番遅れているようだ。私より前に大々先輩の水島さんが頑張っている。還暦を過ぎているのにりっばである。左側の岩尾根を避ける様に急な雪面にルートを取っていき、最後に岩尾根を少し登ると稜線に出た。頂上はすぐそこである。7時30分頂上に到着。祠の前で記念撮影と名雪さんのバンザイで登頂を祝った。山頂からの眺望は全く無くガスの中である。急いで下山する事にする。私だけスキーを稜線直下まで上げてある。慎重にスキーを履き兼用靴のバックルを締め直す。滑り出しは40度近い傾斜であり、尚かつカリカリの雪面。転倒は絶対に



早池峰山頂にて

許されない状況で有る。意を決し思い切って滑り出す。エッジで雪面を切る様な感じで滑って行く。苦労して登った斜面もあつという間に下りてしまい、もう森林限界である。振り返っても徒歩のメンバーの姿はまだ無い。久しぶりに満足のいく滑降が出来た。樹林帯の中をゆっくり流して行くと何となく方向が違う様な気がしてならなかった(朝一の太矢取の為)。登山道の大鳥居が見えて『ほっ』とする。下山してくるみんなを待ち小屋に戻る。小屋到着11時。急いでテントを撤収して12時頃下山開始。

林道をスキーで一気に下り約30分位で駐車場に着いたが、それから徒歩の水島さんが来るまで1時間3

0分も待つ事になりました。

今回の山行は、近年にない素晴らしい山行を楽しむ事が出来ました。同行したメンバーに感謝いたします。又、これに懲りずに誘って下さるようお願いいたします。

3/21 妙泉寺(8:18)

3/22 小田越避難小屋(5:05) - 早池峰頂上(8:02)
- 早池峰避難小屋(9:33) - 妙泉寺(11:52)

(中島 記)

遥かなる苗場山

1998. 3. 29

パーティ L 本図一統、菊地光夫、木村一

永い間登山を続けていると登った山より、登れなかった山の方が気に掛かるものです。今から約20年前、今回と同じ“本図・木村パーティ”でこの苗場山を登ろうとして途中断念してから、20年間気に掛かる山の一つでした。

今回は、通称“茨城マタギ”の菊地が強力な(?)助っ人として同行してくれたので、成功したも同然である。みつまたかぐらスキー場の Gondola & リフトを乗り継いでスキー場の上端に到着し、ここで身支度を整え、雪が締まっていたのでスキーを引張り登行を開始。途中、小休止後スキーにシールを貼付てスキーで登行を続行。この頃より強力な助っ人が遅れ気味になってきたが、全く気にせずシール登行を続行して神楽峰到着10:20。

ここから望む苗場山はボリュームのある立派な山容である。途中、急な雪壁がありルートをとどちらに取るか頭の中で登行ルートを描きながら小休止し、ここにスキーをデボして苗場山へ向けて神楽峰を下り始めた。下降途中でアイゼンを着用し、更に快適に下降して苗場山と神楽峰とのコルに到着。いよいよ苗場山の登行開始、急な雪壁を登り、左に回り込んで、先行する本図リーダーは右手のブッシュ混じりの急斜面を乗越したが、一見すると悪そうなので、左手の急な雪壁をピッケルと左手を雪の中に突っ込みながらの登行で頂上に続く緩斜面に飛び出した。ここから苗場山頂上は目前である。11:45頂上着。ガッチリ握手。苗場山の山頂は広く、雪原という言葉がピッタリの場所であり、今日はこの広い山頂が我々2人のものである。遠くに鳥甲山・平標山が望まれ、特に鳥甲山は登行意欲を誘われ、次に登りたい山がまた一つ増えてしまった感がある。大休止後下降を開始。途中、後続の2人パーティ

とすれ違い挨拶を交わして先程の急斜面は2~3歩後ろ向きで下降するが難なくコルに到着。ここでアイゼンを外しピッケルをザックに取り付けてストックに頼りながら神楽峰の登りにかかるが、朝に下降した時と比べると雪が緩んで足が取られ登り難い。やっとの思いで神楽峰に着くと菊地が居眠りしながら待っていてくれた。小休止後、ここでスキーを付けて直滑降・斜滑降・いい格好とは程遠く、不格好な滑降開始。本図リーダーは快適にいい格好で滑降しているが、菊地&木村は回らないスキーに苦労しながらの不格好になってしまった。程なくみつまたかぐらスキー場に入り、ここからは圧雪状態のスキー場を滑り降りるが、山屋の格好ではスキー場には不釣り合いだ。途中、リフトを1本楽しんだ後 Gondola で下山する菊地と別れ、狭い迂回路を駐車場に向けて滑り降りる。15:40駐車場着。帰路途中、いつもの湯宿で温泉に入るが、いつ訪れても味わいのある温泉だ。

帰路、車の中で次週の雨飾山の山行計画が決定。次週が楽しみだ。

かぐら第3リフト上(8:40) - 神楽峰(10:06~10:13)
- 苗場山頂上(11:39~11:57) - 神楽峰(13:19~13:39) - 駐車場(15:40)

(木村 記)

はじめちゃんの思い出日記 (Part 3)

(戸隠連峰 本院岳ダイレクト尾根)

3月19日(日) 晴れのち雪

未明から降り出した雨がいつしか雪に変わっていた。急坂に端ぎながらカーブを一つ一つ曲がりながら走るバスの周囲を濃い霧が次第に包み込み、いかにも伝説の鬼女紅葉が現れるとしたらこのような日か……。

宝光社の前でバスを降りたのは我々4人だけでした。今回の山行も静かな、そして山と対話出来る登攀になる予感がある。未知の山城に入る時はいつもそうだが、複雑な気持ちが交差する。登攀が出来る事の喜び、未知への期待と不安、そして雪に対する想いと恐れ、しかし、それも登る事に夢中になり登攀に専念する事で忘れてしまう。

ダイレクト尾根の取付きまでは楠川添いにかすかにトレースがあり、数日前に登攀者があった事を告げている。急な尾根に取付いて少し登ると尾根は緩やかになり、樹林帯の中を登るようになってきた。天気も回復し暖かい春の陽射しの中、目前にジャンダルムが望まれ、今回の登攀は案外簡単に成功する予感さえして

いて下降した。この頃から雪が止み、視界が若干きくようになってきた。本図リーダーがルンゼを下降して右手に回り込んだ所でV字状ギャップを発見した。しかしそこまでたどり着くには20mの懸垂下降と急な雪壁のトラバースが必要だ。懸垂下降後、雪を全然付けていない岩壁の下をトラバースするが、この雪壁の下は数百米の岩壁で、もし滑落したら本谷まで一気にとばされてしまう事だろう。V字状ギャップの手前で洞窟を発見し、今日のピバーク地とするがあまり快適そうでないで、近くに雪洞を掘ってもぐり込む。18:30。一晩中西岳本谷には雪崩の音がコダマしていた。

3月20日(月) 晴れ

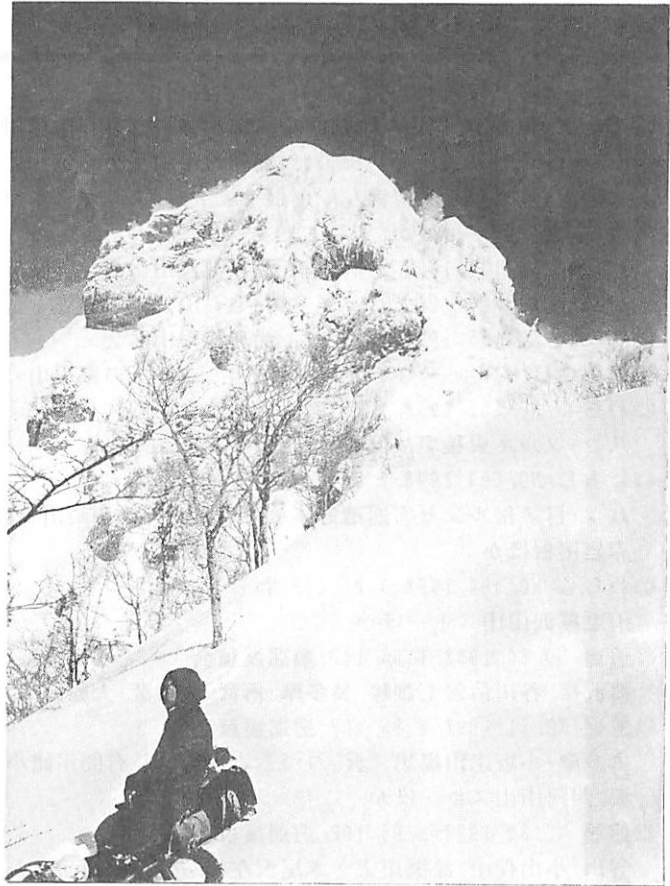
今日も最初から雪壁のトラバース、腰までのラッセルで雪崩の恐怖を感じるが、本図リーダーがトップで快調にザイルを伸ばして行く。3P雪壁を登ると傾斜が落ちてきたのでザイルを解き、プラトへの斜面を腰までのラッセルで登行を続行。目前に第一岩峰・第二岩峰が聳え立つがルートは右手の雪壁をトラバースするか、岩峰を直登する以外選択肢は無い。我々は雪壁をトラバースするルートを探り、少し下降してそこ

きた。帯状岩壁帯の所で休憩後、やせた尾根を登りジャンダルム直下まで来た時、天候が急変し雪が激しく舞い降りてきた。あたかも鬼女紅葉が我々4人を唾笑うがごとく……。いよいよジャンダルムの大トラバース開始だ。急な雪壁をブッシュを掴みビッケルに頼りながら、幾つものラビネンツークを越してトラバースしていくが、ふっと頭の中を雪崩の恐怖がよぎる。『大丈夫だろう』と更に進むが、途中でアンザイレンして40m伸ばしたところでピッチを区切る。約10mの懸垂下降で隣のルンゼに下降するが、相変わらず雪の降りが激しい。視界が15m位しかないためどこにルートを探ったらよいか判然としないまま急なルンゼを腰までのラッセルで左斜上気味に登るが、V字状ギャップが確認出来ない。左上に見えるギャップを目指して20mトラバース後雪壁を直上するが、目の前の雪を崩してラッセルすると自分の顔の位置まで垂直になってしまう。登るにつれて更に悪くなる一方なので、ルートの間違えてしまった事に気付き必死の思

から雪の小リッジ目指してトラバースする。雪の小リッジは所々にキノコ雪が付着しているため苦闘する。上部の岩壁にもいやな感じに雪が付着しており、今にも落ちそうな感じだ、もしあの雪塊が落ちたら我々4人は谷底に流されてしまうことだろう。気持ちばかりアセルがなかなか前進できない、本図リーダーがキノコ雪を越して上部を見るが、ルート判断が難しい様子だ。『右手の小リッジに登れそうさ』と言うので、ブッシュを利用して約40mの懸垂下降で隣の小リッジに取付くが、時計を見ると13時を過ぎている。朝からなにも口にしていないので行動食を口に放り込み、頭上のキノコ雪をブッシュを掴み右から回り込む。さらに雪壁を直上してビッケルを雪面に打ち込み後続を確保するが、後続も絶対に落ちられない登攀だ。もし後続が落ちたら全員が引きずり込まれてしまうだろう。更に雪壁を直上すると岩壁に突き当たってしまった。我々の進むルートは右か左か……。直上と左のルートを試みるが悪相なので、結局右のクロアールにルートを探り、金沢トップでザイルを伸ばしていくが、不安定な雪のため悪戦苦闘している。頭上にはキノコ雪が大きく張り出し、それを越さなければ上には出られ

そうもない。どこを越したらいいのか見当もつかないが、とにかく登らなければ……………。

トップは途中のブッシュでピッチを区切り、空身になり頭上のキノコ雪にアタックして遂にキノコ雪に穴をあけて突破したが、ラストが登る頃には立派な雪のトンネルになっていた。そこから更に急な雪壁を3ピッチの登攀で本院岳のピークに飛び出した。ガツチリ握手。すぐ近くまで夜のトバリがせまり、空には星が輝き、月が明るさを増していた。16:30。ビバーク地を探さなければ……。だが明日の下降を考えると一步でもP1に近づきたい。ヘッドランプを取り出し、月明かりの中疲れた体にムチ打ってP1へ向かって歩き始めた。しかし、まだ西岳のクレットが控えているので気は抜けない。クレットはアンザイレンして通過、1P岩稜20m、2P急な雪壁40m、全員が通過したのが20:00。後続を確保しながら後立山連峰の方向を見ると、八方尾根スキー場の灯りが瞬いている。



あそこには暖かい布団と暖かいストーブがあることだろう。我々には濡れた寝袋と一枚の布で出来たツェルトがあるだけ。しかし、我々には山に対する熱い情熱と、山仲間の熱い友情があるので暖かい夜になる事だろう。稜線の雪庇に気を付けながら西岳を越しP1の手前稜線上でビバーク。22:00。

3月21日(火) 曇り

P1尾根の下降は雪庇の懸垂下降で開始した。更に下に続く急な雪壁を懸垂で下降してナイフリッジを渡り、雪の台地に降り立った。そこから樺の木を支点にして20mの懸垂下降で、両側がスッパリ切れ落ちたナイフリッジの上に出た。右側は仏沢に数百m切れ落ち、左側は大きな雪庇となって本谷に張り出している。ここを慎重に渡り、これに続く雪稜を下り、ジャンクションピークに降り立った。これより下はトレースがついており、昨日P1尾根を登攀していたパーティはここまでしか登っていないらしい。更に3回の懸垂下降を繰り返すとP1尾根も傾斜が緩くなり、これに続く簡単な雪稜を下りきると天狗原と呼ばれている開けた台地状の所に出た。振り返るとダイレクト尾根&P1尾根が一望にでき、3日前に見たときより高く・険

プラトーにて

しく見えるのは気のせいか……………。

山に登攀者に課した条件を乗り切った時の充実感、山に溶け込み自然と同化出来た時の喜び、そんな事を求めて我々は山に登るのかもしれない。戸隠は我々に山の厳しさ、山の楽しさを教えてくれた、雪と戯れ、雪と親しみ、雪と苦闘した充実した3日間。この充実感で一杯になったザックを背負い宝光社の部落へと下っていったが、空には再び雪が舞いはじめていた。

1978年3月19日～3月21日

(本図・木村・金沢・富所)

《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

- ◎Rohman NO. 152, 1997, 12 B5 56P 浦和浪漫山岳会
南会津・荒秃山、川内・大底川・銀太郎山・銀次郎山・中杉川・小六山、平成9年度総会資料ほか
- ◎Rohman NO. 153, 1998, 1 B5 32P 浦和浪漫山岳会
大滑沢右岸尾根、大滑沢左岸尾根ラットレ、タカマタギラットレ、越後駒ヶ岳雪上訓練、冬山合宿・南会津・会津駒ヶ岳ほか
- ◎Rohman NO. 154, 1998, 2 B5 46P 浦和浪漫山岳会
房総・湊川梨沢左俣、川内・釜ノ罫・毛石山、奥利根・笠ヶ岳、上州神津牧場氷瀑、白毛門ほか
- ◎Rohman NO. 155, 1998, 3 B5 42P 浦和浪漫山岳会
蔵王OB山スキー、冬の集中・金城山、上越・下の権現山・唐松山、南会津・山毛櫛沢山ほか
- ◎わらじ NO. 502 1998, 1 B5 22P わらじの仲間
八ツ・ツルネ東稜事故反省、飯土山ラットレほか
- ◎わらじ NO. 503 1998, 2 B5 24P わらじの仲間
八ツ・日ノ岳ルンゼ雪崩遭難事故、冬合宿・刃物ヶ崎山・巻機山・中尾ツルネ、八海山・中の岳、爺ガ岳・赤岩尾根ほか
- ◎わらじ NO. 504 1998, 3 B5 22P わらじの仲間
山毛櫛沢山スキーほか
- ◎逍遥 NO. 80 1998, 1 B5 14P 逍遥溪稜会
霞沢岳、谷川岳雪上訓練、奥多摩・落沢、大菩薩・大鹿沢ズミガ沢、八ツ・権現岳ほか
- ◎逍遥 NO. 81 1998, 2 B5 16P 逍遥溪稜会
奥多摩・小坂志川湯場ノ沢、つづら岩、奥武蔵・有間川姥小屋沢、仙ノ倉北尾根、丹沢・大滝沢マスキ嵐沢、四阿山スキーほか
- ◎逍遥 NO. 82 1998, 3 B5 10P 逍遥溪稜会
谷川・小出俣山、盆掘川栗ノ木尾沢左俣、八ツ・硫黄岳ほか
- ◎Next! No. 25 1998, 1 B5 24P 山岳溪流釣り集団むげん
丹沢・広沢寺の岩場、つづら岩ほか
- ◎Next! No. 26 1998, 2 B5 20P 山岳溪流釣り集団むげん
湯河原・幕岩ほか、
- ◎Next! No. 27 1998, 3 B5 20P 山岳溪流釣り集団むげん
奥武蔵・日和田山ほか
- ◎とまのかぜ No. 62 1998, 1 B5 16P 童人とまの風
上信越・白砂山、八ツ・広河原3ルンゼ、那須・三本槍ヶ岳、八甲田・山スキーほか
- ◎とまのかぜ No. 63 1998, 2 B5 24P 童人とまの風
西丹沢ハイク、越後・菅名岳、白毛門、南会津・三岩岳、越後・八海山、那須・三本槍ヶ岳山スキー、八ツ西面氷瀑、湯河原幕岩ほか
- ◎とまのかぜ No. 64 1998, 3 B5 18P 童人とまの風
丹沢・勘七の沢、日光白根山、吾妻・グランデコ・西吾妻山、黒姫山スキー、安達太良山ほか
- ◎山紫水明 No. 1998, 1 B5 12P 山旅の会
富士雪上訓練、安達太良山雪上訓練、冬合宿・八ヶ岳赤岳ほか
- ◎山紫水明 No. 1998, 2 B5 16P 山旅の会
黒斑山、北八ヶ岳、高峰高原ほか
- ◎山紫水明 No. 1998, 3 B5 6P 山旅の会
湯河原・幕岩ほか
- ◎すずらん通信 NO. 202 1998, 1 B5 8P 鈴蘭山の会
槍ヶ岳ほか

- ©すずらん通信 NO.203 1998.2 B5 8P 鈴蘭山の会
富士・雪上訓練ほか
- ©すずらん通信 NO.204 1998.3 B5 8P 鈴蘭山の会
親睦山スキー、上信越・白砂山山スキーほか

以上閲覧したい方は本図まで

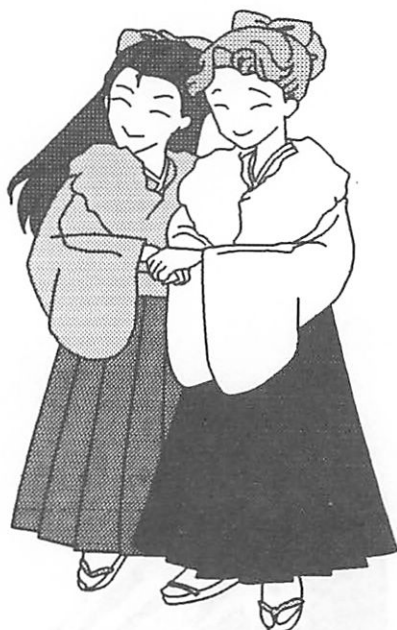


《編集後記》

R&Vも早いもので今回号で創刊以来7年が過ぎました。今、思いかえってみると“あっ”という間に過ぎてしまった感じがします。これも会員みんなの協力のおかげだと思いますが……………。

これからもず〜っと会が活発に活動していき、R&Vも編集の仕事が忙しくなるよう一人密かに思っています。

p s…原稿の締め切りは、必ず守ろう！。もし守れないような奴は、巻頭文を書かせるぞ！。



季報[R&V]第28号 発行1998年 冬 発行者：鯉河仁志
発行所：ACC-J茨城 〒306-0501 茨城県猿島郡猿島町逆井318
生井一男方

編集者：生井一男
印刷所：やさど印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団